

井上円了と社会学

Enryo Inoue und Soziologie

柴田 隆行

Takayuki SHIBATA

1 はじめに

「井上円了と社会学」という標題は、あるいは意外に思われるかもしれない。しかし、社会学は、井上円了が描く学問体系の一角にしっかりと場を占めている。さらに、井上円了の主要著作で「社会」という単語を検索すると、ヒット数は優に1500を数える。それほどに井上円了は「社会」という言葉が好きである。ただし、学問的な定義を踏まえた概念としてはその10分の1に減ずるかもしれないが、それでもなお少なからぬ箇所ですべて「社会」についての学問的言及が見られる。

ところで、日本の大学で最初に社会学を講じたのはアーネスト・フェノロサであり、井上円了は東京大学でその講義を受けている。井上円了の哲学思索およびその実践のなかで「社会」ないし「社会学」がどのような役割を果たしているかを検証することはそれなりに意味あることと確信する。

本稿では、最初にフェノロサの社会学講義を概観し、次いで明治初期の日本における社会学理解の特質を先行研究に従って整理し、その上で本論として井上円了の社会および社会学理解がどのようなものであったか、社会学は彼の学問体系の中でどのような位置を占めるかについて明らかにしたい。

2 フェノロサの社会学講義

東京大学におけるフェノロサの事績を調査・解明した山口静一氏の研究に拠ってまずは基本情報を得ておこう⁽¹⁾。フェノロサは、1878（明治11）年8月に政治学担当外国人教師として東京大学に招聘され、同年9月から哲学史、政治学、理財学の講義を開いた。フェノロサによる講義報告書によれば、フェノロサは文学部第三年級生を対象にした「政治学」において、「方今世態開進シテ大ニ其面目ヲ改ムルヲ以テ特ニ本科始メニ社会原論ノ科目ヲ加ヘ而シテ生徒ヲシテ社会ハ其組織千状万體ニ

シテ百般ノ活動ヲ作ス一箇ノ有機体タルヲ認識セシメ」⁽²⁾と報告している。世態とは society の初期邦訳語である。受講生は井上哲次郎、和田垣謙三、岡倉覚蔵ほか全8名。

1881年のカリキュラム改訂でフェノロサは政治学担当を外されたため、社会学は文学部第二年級生を対象とする「哲学史」のなかに組み込まれた。「申報」には、「哲学ノ主義ニ競合スル社会組織ノ状況ノ稍々緊要ナルモノヲ充分ニ曉知セシムヘキ概旨ヲ講授ス尤スペンセル氏著世態学、モルガン氏著古代社会論ヲ以テ参考書トシ専ラ講義ヲ以テ教導スルモノトス」とある。在籍者は阪谷芳郎、棚橋一郎ほか全15名。

井上円了が東京大学文学部第一科（哲学科）に入学したのはこの年である。初年度フェノロサからは「論理学」を学んだ。社会学を含む第二年級生対象の「哲学」を履修したのは翌1882年度で、受講登録者は、第一科は井上円了1人、第二科（政治学・理財学科）は金井延ほか5名、第三科（和漢文学科）は三宅直温1人で、合計7名であった。「申報」によると、講義内容は前年度と同じである。

同期にこの講義を受講した金井延の聴講ノート（写し）が残されており、秋山ひさ氏がこれを翻刻し公刊している⁽³⁾。金井のノートには、1882年9月21日から同年11月17日までの21回分が記されており、秋山氏によると、そのうち「井上か三宅、または両者のノートによって清書したという分は5回あり、プロフェッサー自身のノートから写したあるいは補ったと註のある分は6回ある」（105頁）という。ここに記されている「井上」について、秋山氏は「井上哲治郎」と注記している（103頁）が、状況証拠からしてこれは明らかに井上円了であろう。金井と同時期に井上円了もフェノロサのこの講義を受けており、「三宅」も同期の三宅直温を指すと思われるからである。したがって、金井延によるこのフェノロサ聴講ノートにより、井上円了がフェノロサからどのような社会学を学んだかもわかるはずである。この講義については、翻刻・邦訳者の金井氏および宮永孝氏の論稿⁽⁴⁾で概略紹介されているので、ここでは必要最小限の言及にとどめる。

1882年9月21日開講の第1回の冒頭でフェノロサは、「幾何学や地質学のような厳密科学では、それがどのようなものであれ、研究を始める前に私たちは定義によってその若干の観念を得ることができます。しかし、哲学の場合はこれとまったく異なります。私たちは哲学を、研究する前に定義することはできません。」として、哲学と科学との違いを述べ、さらに科学は因果関係を扱うものと定義される。因果となるのは勢力であり、勢力は力学の対象である。したがって、科学は力学的だが、力学的ではない原因というものがある。そうした原因を扱うのが哲学である。このように述べたあと、第一講の最後に、「私はこの講義で社会学を、将来哲学研究を行うための導入として扱いますが、しかし、一つの科学として扱います。したがって、科学としての社会学が私たちの主題です。」と述べている。社会学は哲学研究のための導入として取り扱うが、これはあくまでも科学であって哲学ではない、とフェノロサは念を押している。のちに井上円了が、社会学は哲学の一種であると主張することと異なる点をわれわれは記憶にとどめておこう。

第二講以降、自由意志、意識の事実、道徳性、理性、等々についての哲学的議論が続き、「導入」とされた社会学の説明は、第四講の後半まで待たされる。

さて、社会学を考えると、人間のあらゆる行為は空間と時間のもと、因果連関のもとに入ることの思い出さなければなりません。したがって、社会学は科学的に論じることができます。したがって、私たちは社会学を、社会的行為の原因と結果を扱うものとして定義して良いでしょう。

このように述べたあと、ところで、社会的行為とは何であり、社会的人間とは何であるか、とフェノロサは問い、下等動物世界、原型人類、原始人、社会という進化系列を挙げたうえで、社会を協同（co-operation）と定義する。第五講からようやく社会学ないし社会が主題として講じられる。協同、異種混交（heterogeneity）、分化（differentiation）と統合（integration）、優勝劣敗適者生存（struggle for existence）、規則（regulation）——軍事的・政治的・法的・宗教的・道徳的・様式的——、形式主義、個人主義、そして社会の盛衰を経て最後に調和に至る。こうした社会学観は、多くの研究者が指摘するように、スペンサーの社会進化論を下敷きに見て間違いないだろう。

井上円了が受講した講義の2年後の1884年に、清沢満之や高嶺三吉らが受講したフェノロサの「哲学史」講義が、大谷大学の研究グループにより翻刻・邦訳されている⁽⁵⁾。山口静一氏によると、1884年度以降の詳細な講義報告書がないようだが、1883年度までは井上円了が受講したのと同じ講義概要が報告されており、1884年度もほぼ同様の主旨で開講されたものと思われる。しかしながら、高嶺三吉が筆記した「哲学史」聴講ノートを見る限りでは、第1回講義で哲学と科学の違いが説明され、第2回では科学と空間・時間との関係、第3回以降も哲学と科学の違いについての説明が続くものの、最終日11月4日までの第1学期にフェノロサが社会学ないし社会について言及した箇所は1つも見あたらない。

他方、『学芸志林』1880年7、8、10月号にフェノロサの「世態開進論」（井上哲次郎・和田垣謙三・木場貞長訳）と題する講演が掲載されているが、そこでフェノロサは、自分は世態学士ではないし「世態ノ現象タルヤ原来錯綜シテ分解シ難キ」であるから、世態学の一部を講述するにすぎない、としつつ、「原人」からの世態開進の歴史を講じている⁽⁶⁾。愛することも助けることも知らない原人から社会進化史を説き起こし、「外面ヨリ圧力」が加えられて初めて「私心ヲ抑制スル」社会の第一歩が踏み出される。言い換えれば、「社会ナルモノハ初メハ一種強圧ノ勢力ノ外ニ在ルアリテ人類ヲ結合シ其ヲシテ強ヒテ相助ケ相救ハシムルニ非レバ決シテ世ニ起ルベキニ非ザル」ものだと強調する。したがって、「政治学講義」（刊行年不明のパンフレット）では、ルソーのように「自主自由ノ権理」を立てて政府の権理に服従しないと唱えるのは「抱腹千万」であり、「政府ナクムハ人民ノ権理モ亦ナキ者タルナリ」と主張する。『世態進化論』の言説に戻るならば、「専制政府ノ力ニ因リテ人民始テ団聚スル」とフェノロサは論じる。もちろんフェノロサは自由を否定するわけではない。「生存競争ノ争乱」のなかで専制政府が起って国内平和が訪れて初めて自由の精神も芽生える、つまり、「自由ナル者ハ専制政府ノ起リシ後ニ出デンコト明ケシ」という。

山下重一は、「世態開進論」についてもフェノロサが「スペンサーの『社会学原理』第一巻の強い影響を受けていることは枚挙にいとまない」⁽⁷⁾と指摘する。その一例として、冒頭で論じられている

「宇宙ノ理」をフェノロサが社会学者の立場から明らかにしようとしているが、それはスペンサー『社会学原理』第一巻を「全面的に踏襲」しているからだという。ただし、フェノロサのスペンサー解釈は自由民権論者のスペンサー解釈に対抗する官学アカデミーの立場からの穏健化への解釈転換だとする見解に対し山下氏は反論し、フェノロサのこの講演が「社会進化の第一段階としての未開社会から軍事型社会への変遷を説く学術講演」であったことを無視したもの、と批判する。しかし、先に言及したフェノロサの『政治学講義』を見る限り、人間社会の形成において専制政府の力が必要だとの見解は拭えないと思われる。

3 明治初期日本の社会学理解の特質

日本の大学で社会学を最初に講じたのは1878年のフェノロサであるが、日本に社会学が受容・紹介されたのはもちろんそれより早い。下出隼吉『明治社会学史資料』(2005、いなほ書房)によれば、1871(明治4)年刊のJ.S.ミル著、中村敬太郎訳『自由之理』が最初で、以下1882年までに26点が挙げられているが、「其大部分は政治論」であり「此時代に於ける社会学説の傾向等に就いては殆んど注意すべきものはない」という。1878年刊のコント著、塚本周造訳『論理学』に「交際学は人間社会の理を講ずるの学」と記されており、ここで sociology は「交際学」と訳されている。society が「社会」と訳された最初は1876年のギゾー翻訳本からではないかと下出氏は述べている。society はそれまで「仲間、一致、交り」「会社」等と訳されており、「社会」は「三田系の人々」に最初は用いられたという。『哲学字彙』や東京大学では sociology は「世態学」と訳されていたことはフェノロサ講義でも確認した。

「社会学」に関する日本最初の著作は1883年刊の有賀長雄『社会学』第1巻だと下出氏は述べている。これはスペンサー社会学の祖述だという批判もあるが、必ずしもそうではない、と下出氏は弁護するが、この頃、スペンサーの『社会組織論』や『社会学』も邦訳されており、フェノロサの東京大学での講義もスペンサーの影響下にあることは先に見た通りである。ただし、フェノロサは、当時の日本の思潮がイギリスやフランスからドイツへ関心を向け変えたことを反映して、スペンサーを講ずるとともにカントやヘーゲルの哲学を詳しく講じており、フェノロサは「ヘーゲルの哲学にあるところの進化思想と、科学的の進化思想と、この両者を打つて一丸となし、その上に出でようと努力した」という井上哲次郎の回想⁽⁸⁾はしばしば引用される。

有賀長雄『社会学』は3巻本であり、巻一「社会進化論」、巻二「宗教進化論」、巻三「族制進化論」という構成である。「巻一 社会進化論」(1883東京書林)の凡例で有賀は、社会の発生と発達を述べるところは多くスペンサーの立論に依ると断っている。

本論冒頭でまず、「社会学とは人間社会の現象を解釈するの理学なり。」と定義される。ここで言う「人間社会」とは「一般に人類の聚まりて、或は部落を結び、或は国家を成せる様を指していふ」と

し、また、「解釈」というのは「原因結果の次第に依て事物の由来を説明するの謂」である。したがって、社会学においても原因結果の次第を追ってその進化を説明しなければならない、とされる。さらにここで言う「理学」とは、英語で言う science のことであり、一つないし数個の原因結果を論ずるのではなく、「凡そ其科其類に属する事物は悉く之を網羅し尽くして其原因結果の次第を講ずる学をいふ」と定義されている。要するに、「社会学は古今東西の別無く、一般に社会と称すべき者の進化の理を講ずるの学」である。しかるに、社会は「協力分労する人類の聚合」であるが、それは太初より不変に存在するものでもなければ神仏の創造物でもないがゆえに、必ずその始めがあり終わりがある。そうであるならば、それが発生する原因があり、衰滅する原因があるはずであり、それは何かが問われなければならない。これを問い解明するのが社会学である、と有賀は言う。有賀のこうした社会学定義も、本人が冒頭で断っているように、スペンサーの社会学に基づくものであり、フェノロサの東京大学での講義内容とも合致するところが多い。

有賀長雄のこうした社会進化論について、たとえば松本三之介氏は2017年に公刊した論文集⁽⁹⁾の第五章「有賀長雄の社会進化論」で、「個人を主体とした生存競争が、集团的結合による生き残りをめざすことによって、やがて社会という組織的諸集団の発生を促し、これらの社会集団が相互に生存のための競争をくり返すことを通して、社会組織の進化が生まれたとする考え方に立っていた。」と指摘し（131頁）、さらにそうした考えのもとに「聚合して協力分労するは勝ち、人々孤立して戦ふは負くる」という集団主義的哲学があった、と批判的に述べている。スペンサーの影響下にあるこれら社会有機体説的な社会学説は、秋元律郎氏⁽¹⁰⁾も批判的に取り上げ、そこでは「民衆が最後まで政治参加の主体として認識されていなかった」（24頁）とし、「ときの政府に忠実なイデオロギーとして採用」（35頁）されたにすぎないと批判される。福澤諭吉でさえ「真の市民社会の担い手にたいする理解」がなく、まして「人民の抵抗権や革命権が主張されることはなかったし、またこれが期待されることもなかった」（25頁）と秋元氏は続け、加藤弘之の『人権新説』の人権などは「社会一般の安全幸福を維持するため為政者によって保障され、これによってはじめて存立しうる」（29頁）ものにすぎないと批判する。こうした否定的評価が正しいか否かはいま問わないとしても、明治後期から第二次世界大戦までの日本社会のありようを顧みるならば、日本の社会学の成熟度が問われるのも当然の所為とすることができであろう。

4 井上円了の「社会」観

以上により、井上円了と社会学というテーマを論じる土台が整ったと思われるので、いよいよ井上円了が社会学ないし社会をどのように捉えていたかを検証することにしよう。

冒頭で述べたように、円了が著作のなかで「社会」という単語を使う頻度はかなり高い。たとえば初期の『真理金針』ではなんと320回も使用している。『倫理通論』でも85回、晩年の『奮闘哲学』で

も100回を数える。そのようなわけで著作すべてから拾って検討する余裕がいまはないので、ここでは「社会学」と「社会」についてある程度まとまった議論がなされている著作に限定して検討することにした。取り上げる順番は公刊順として、年代的な変化があるかどうかも見ておきたい。

まずは1882(明治15)年10月と12月に『開導新聞』に連載された「宗教編」に、「今日の活動社会」「世間は活社会なり」(25:715)といった文言が見られる。この論稿は第一講のみで終わったが、その末尾に全編の目次が掲げられている。その第二講政治法律論第三節第二条に「社会は活動物なること」(25:722)という項目が立てられている。先に見たように、井上円了はこの年の9月から11月までフェノロサによる社会学講義を受けており、社会を活動態として捉えることはフェノロサやその背後にいるスペンサーの影響と思われる。

この翌年1883年秋から円了が取り始めた「稿録」と題する学習ノートがある⁽¹¹⁾。そこにフェノロサの聴講記録は残念ながら含まれないが、スペンサー『哲学の第一原理』、スペンサーからミルへの手紙、スペンサーとヘッケル、ならびにウォード『動態社会学』(Lester Frank Ward, *Dynamic Sociology, or Applied Social Science*, 2 v. New York 1883)のノートがある。しかし、これらのノートには、宗教と科学の同一性と差異性、倫理的教説、幸福概念等について短い記述があるだけで、社会に対する言及はない。だが、これとは別に、シュルツァ氏がフェノロサ講義の一部だと論証する⁽¹²⁾ *Development of Chinese Philosophy* と題する流暢な英文が転載されている。シュルツァ氏によると、ここに見られる一文や単語に、上述の金井延によるフェノロサ聴講ノートと類似のものがいくつか見出せるという。この講義録の冒頭は次のように記されている。

社会が有機体であることは、現在一般に認められている。同じ真理が哲学体系についても言えるかもしれない。私が思うに、哲学は生き物である。哲学体系は、まだ出始めの萌芽から連続的な段階を経ていっそう高度で複雑な構造に成長する。各国の歴史を研究すると、哲学は社会的かつ政治的な諸制度ときわめて密接な関係を持つという、これとは別の真理があることがわかる。したがって、どの歴史にも、哲学が発展する諸々の要素が見出せる。あらゆる文明は進歩する。この事実からわれわれは、哲学は社会全体に生命を付与し文明を進める内的精神ないし力である、と推察する。社会の構造全体を個体的有機体と比較するとしたら、その社会で優勢な哲学は神経系統と比較できるかもしれない。しかし、神経系統が他のあらゆる体系の発展なしには発展しえないのと同様に、社会における哲学の成長は体系全体の成長なしには不可能である。それでは、社会における文明の発展で最も必要とされる条件は何であろうか。それは、異なる諸要素の闘いであることは間違いない。(拙訳)

これを読むと、たしかにフェノロサおよびスペンサーの社会進化論が基礎にあることは明らかであろう。そしてまた、こうした考えは井上円了の諸著作にも色濃く反映していると思われる。それは、同じく円了が東京大学在学中に書いた「読荀子」(『学芸志林』1884年8月)で確認できる。その後半

で「社会の進化」(25:730)に触れ、「社会は下等より高等の地位に進化する」(25:737)、「社会変遷すれば、その法もまた変ぜざるをえ」(ibid.) ずだが、荀子はそのことを十分理解しているとは言えない、と円了は批判する。しかし、荀子が「群道当則万物皆得其宜」と述べていることは、「人みな自然の勢い群居せざるべからず、群居すれば分勞協力の制を設けざるべからず」という意味であり、これはまさに「社会進化の理」にほかならないと評価する(25:738)。これもフェノロサの「世態開進論」を想起させる。人の禽獸と異なる点は人が群居団結して協力分勞する点にあると荀子は述べるが、スペンサーの社会論も「帰するところこの原理にほかならない」(25:739)とする円了の言い方には、東洋思想の優位を匂わせるものがある。円了はさらに続ける。荀子の言う「礼」は、坐作進退の風儀を言うのではなく「社会の秩序、自他の分限、上下の関係等」(25:740)の合称を言う。このように円了は荀子の社会進化論的な解釈を展開している。そして次のような結論を下す。

余かつて社会学を研究し、はじめて社会の一個の有機体なるゆえんを知る。今、有機体の發育を驗するに、その成長するも衰殺するも、遺伝と順応との二力の交互作用するありて、平称点をその間に維持せんとするによる。社会の進歩もまたしかり。(25:743)

秩序を重んじる主義と改進する主義の2つがあるが、どちらかに偏るのが良くない。荀子の政法は秩序重視に偏っている。しかし、それは彼の時代背景を考えなければならない。荀子が一方に偏したのは「時世の勢い」でありやむを得ない、と円了は言うが、そこまで荀子を擁護する必要があるのだろうか。時世の勢いも社会が進化すれば自ずから改善されるのだろうか。

次に、1886年に公刊された『真理金針』を読もう。本書のもとには1884年10月から『明教新誌』に連載した論文で、1885年にまとめて『破邪新論』と題して公刊、のち『真理金針』と改題された。主旨はキリスト教批判であるが、小林忠秀氏によれば、「仏教界の人士の自覺を促す啓蒙の書」であり「キリスト教批判がどのような形で手懸かりとして使用されて、円了本来の主張が展開されているかということに注目すべき」(選集第2巻解説)だという。上述のように、本書で「社会学」は2回、そして「社会」という単語は320回使われている。おおむね社会進化論の開陳である。

まず、初編の第三節自由意志説で、良心の進化が社会の進化に応じていると主張される。仁心善行の本源はすでに禽獸に胚胎するが、人は生存を全うせんがために社会を団結させなければならず、社会団結のためには協力分勞しなければならない。協力分勞するためには自他互いに相親愛しなければならない(3:41-42)。ところで、一個人と社会全体とは密接な関係にあり、一人を利すれば社会全体を利することになる。逆に言えば、社会公衆を愛する人はその実自分自身を愛する自利自愛の人である。利他は自利の進化したものである(3:41)。しかし、続篇によれば、「社会の真理は腕力競争、優勝劣敗」(3:145)にあると言う。とはいえ、社会は一個の有機体(3:162)であるがゆえに、優勝劣敗だとしても、社会の存在を前提とする限りでは協同団結、協力分勞を欠かすことができない。問題は社会をどのように進化発展させるかにある。人類の初期段階では、「人民は互いに相離散して生存」

し「互いに分業助成する」(3:178) ことを知らなかった。そこに社会団結が生じるのは競争の結果である、と円了は言う。その際特に有効なのが種族間の競争である。一属の内部で相争い人民が分散していたら、そこに勝ち目はない。一種族内部の「優者に服従して互いに相助くるときは、その一属ますます勢力を得て、つねに勝利を占むる」(3:181)。自然に淘汰の規則があるように、人界にも「競争変化の事情、適種生存の理法、自然淘汰の規則」(3:185) があり、この規則に従って生ずる作用を進化という。宗教の世界もその例外ではない。概して仏教僧侶は団結力に乏しい(3:188) が、仏教の興隆を測るには社会の競争に加わらなければならない。進んで外教と競争しなければならない。「僧侶をして優勝劣敗の精神を發し、結合団体の風習を養わしめ」(3:190) しなければならない。「内には自他、諸宗諸派の間に競争し、外には他教、他学他社会の者と競争」(3:189) して初めて社会は進歩する。社会は「常に競争し常に淘汰して漸々高等の地位に進化するもの」であり、「狂風激浪の間に生存を全う」(ibid.) しなければならない。こう見ると、たしかに小林氏の言う通り、本書は仏教徒に対する啓蒙の書と言えるだろう。

1887年に公刊された『仏教活論序論』および『仏教活論本論』で円了は本書の目的を、「仏教を改良して開明の宗教」(3:354) にすることに置いている。ここで「社会」は、「宗教編」で強調された活動物という視点が強調される。社会はその全体からして「一活物」であり「衆多の活物相結合して一大活物」をなす(4:21)。近代の学者は社会を一個の有機体と捉える(4:128) が、社会は進化の産物であるから、始めから有機体であったわけではない。協力分業が成り立っていない下等社会ではその一部が失われても全体が害されることはないが、協力分業の社会では部分の欠損は全社会の生存を脅かす。社会の発展により政府組織が成り立ち、さらに中央政府ができれば分業が発達する。古代野蛮社会では自利自愛が善行である(4:144) が、競争淘汰により、社会は団結を強め相親愛となる。ゆえに「人に愛他の公情あるは全く社会進化の結果なり」(4:146)。

『仏教活論本論』第二編顯正活論では、社会学の学問的位置付けが論じられる。円了によれば、学問は部分の学である理学と全体の学である哲学とに二分され、哲学は有象哲学と無象哲学すなわち純正哲学とに分かれる。有象哲学は理論学と応用学に分かれ、前者は心理学と社会学に分かれる。応用学は論理学、倫理学、審美学、教育学、政治学等である。社会学は「社会の上に生ずる現象を論究する学」であり、社会の現象を論究して「その規則を考定する学」(4:238) であるがゆえに理論学に属するという。しかし、学問を部分学と統合学とに分けて、後者は純正哲学のみを指すとするならば、社会学は理学に属す。理学は有形と無形に分かれ、前者は物理学や化学等であり、後者は心理学や論理学、そして社会学等である(4:246)。これを要するに、社会学は、統合学すなわち哲学のうち無形的理学すなわち有象哲学であり、さらにその理論学であるということになる(4:248)。

同じく1887年公刊の『倫理通論』では、「社会学」が3回、「社会」は85回使われている。社会学に関して言えば、倫理学は純正哲学や社会学等と大いに関係すると言われているだけで(11:23)、その同一性と差異性が詳論されているわけではない。第30章で自愛と愛他と兼愛について論じられ、社会は自身と他人と互いに連合団結して成り立つ。「自身も他人と相全うして始めて社会の生存を見るべ

し。」(11:41) これを歴史的に見るならば、古代人民は自愛あるのみ。そこから進んで愛他が起こり、さらに進むと自他兼愛が不可欠であることを学ぶ。つまり人類の進歩は自愛より始まり兼愛で終わる。ゆえに、将来の目的は兼愛にある (ibid.)。第99章は社会の進化と題される。人類初期は無意自然の性に従って目的なく挙動するだけだが、人類間の競争淘汰により社会の団結が生まれ、群居団結して互いに相助くるに至る。種属間争いの場合は、各人離散して争うより衆人集合して争うほうが益あり、こうして協力分労の制が起こる。そして自利自愛から進んで利他愛他、利他博愛が生まれて人類普通の道德となる (11:94)。

時代が少し飛ぶが、1891年に公刊された『倫理摘要』では、その社会論は前著と大差ないが、巻頭に倫理学派名義考が設けられ、Socialismを社会教と訳し、それは「人間の同等同権なる道理に基づき社会共同主義を唱え私有財産を廃する」811:143) ものと定義される。続いて倫理学略史があり、そこでコントの倫理学に触れ、それは実験哲学であり、コントにとって倫理学は社会学の一部とされていると言う。「人の互い相愛し相親しむの情は一個人の経験より生ずるにあらずして、人々互いに結合協和すべき天性を有することによる」(11:154) ものであり、親愛こそ社会発達の原理にして人世の大目的であるとする解説がやや新しいところである。

『仏教活論本論』第二編で、社会学は有象哲学として、無象哲学である純正哲学と区別されていたが、1891年の哲学館における「純正哲学総論」講義および1892年の「純正哲学講義」で社会学の学的位置について論じられているので見ておこう。

前者では、社会学は「衆人相集まりて結成せる社会の上に生ずる現象を論究する学」と定義され、その規則を考定するがゆえに理論学とされる (1:250)。社会を組織する一個人の体は有形であるが、その現象は無形であるから、社会学の対象は「無形中の有象」である。ゆえに、社会学は哲学の一部である有象哲学であり、そのうちの理論学に属するという。これは『仏教哲学本論』第二編と同じである。

後者では、一個人のことがらを研究する心理、論理、倫理、審美、教育等に対して、「衆人結合」を研究するのが社会学であるとされる (7:31)。社会は、「一団の衆人が協力、分業の組織をなせるもの」であり、社会が一段進歩して政治上の組織機関を持つと国家になる。社会学は衆人結合の現象を研究するが、それは実験哲学中に入るがゆえに理論部に属する。言い換えれば、それはまだ応用に至っていない。ところで、ここに一つの疑問がある、と井上円了は言う。すなわち、社会はわれわれの視聴しうる実形を持っており、一つの有機物と見なされるべきものであるがゆえに、有形学たる理学の部門に入るのではないか、という疑問である。この疑問に対して円了は次のように答える。有機物はその各部分が有形の筋肉をもって相連接しているのに対して、社会はただ人と人との関係で連接するにすぎず、その関係は各人の意識上の約束であり、無形の連絡であり、無形の精神による現象であるがゆえに、社会学はやはり哲学に属する、と (7:32)。

事物は有形と無形に分けられ、有形を扱うのが理学、無形を扱うのが哲学である。そして、無形は有象と無象に分けられ、純正哲学と宗教学は無象哲学であり、それ以外はみな有象哲学である。これ

が井上円了の学問体系の略図であり、これは初期から晩年まで変わらない。じっさい、日本の大学において社会学は長く哲学の一部として位置づけられていたが、それも同様の発想に依るものであろう。なお、1899年の『通俗講談言文一致：哲学早わかり』でも同類の学問分類がなされているが、社会学は「衆人団体の上に生じたる心理的現象を研究する」(2:41)とあり、その「心理的現象」という規定が、妥当性はともかくとして、目新しい。

最後に、井上円了晩年の著作に分類しうる1917年公刊の『奮闘哲学』を見よう。「社会学」が1回、「社会」という単語が100回使われている。人は天地の間に生まれ宇宙の中に存在しているが、同時に人間の心中に天地も宇宙も備わっている。「万物はみなわれに備わる」と孟子が言う通りである。仏教では万法唯識または万法唯一心と説く。西洋哲学では人心を小宇宙と言う。このように述べたあと、円了は、「西洋の社会学にては国家社会を有機体と比較しているから、国家社会は大なる生物にして、生物は小なる国家社会とみてもよい」(2:255)と言う。しかし、天地宇宙が人心にありということと、社会は有機体であるということとは、概念枠にズレがある。つまり、同類には語れないはずである。

その第5講は社会観と題され、一六節に「余の社会観」という項目が置かれている。それによると、われわれは近く国家のために尽くすと同時に広く社会のために尽くさなければならない。「世界ありて人類あり、人類ありて社会あり、社会ありて国家あるとすれば、国家をさかんにするには社会を盛んにしなければならぬ。つまり社会と国家とは相待ち相よるものである。」(2:314)と言う。円了は社会と国家とをどのように区別して捉えているのだろうか。国家には「近く」、社会には「広く」という副詞をつけ、世界の中の人類、人類の中の社会、社会の中の国家という順番で論述しているところを見ると、国家は社会形態の一部として捉えているのであろうか。続けて語られる、「国家の道德として忠孝を本とするならば、社会の道德としては仁義を本とすべきである」(ibid.)という説明から察するに、国家は人間の縦関係を、社会は人間の横関係を示しているように見える。議論はその後公私の問題、社会公共心、公德心に移り、国家と社会との関係をさらに深く掘り下げた議論はここでは見当たらない。

なお、円了の主要著作をもう1点触れたい。それは、1893-1894年に公刊された『妖怪学講義』である。その第一巻総論で述べられている学問体系論には、先に見たものと同じものと若干異なるものがある。学科表の第一は、学を理学と哲学に分け、哲学を有象と無象に分け、さらに有象哲学を理論学と応用学に分けて、社会学はその理論学に位置づけられることは、先に見たのと同じである。第二表では、社会学は理学の一分野に位置する。すなわち理学が有形的理学と無形的理学とに分けられ、無形的理学の理論学の1つとして社会学が挙げられる。この分類も『仏教活論本論』第二編で見られた。ここでは、妖怪学をこうした学問体系に位置づけるとするとどこに位置するかが問われている。円了によれば、妖怪学は、狭く言えば心理学の応用学であり、広く言えば百科諸学の応用学である(16:68)。あるいは、妖怪学は諸学の原理の誤用より起こるという見方もあり、あるいは人知発達の程度に見る見方もある。そこから人類学ないし人種学から妖怪を研究する立場も生まれ、また、妖

怪学を「外界に現ずる風俗、習慣の上につきて人知の程度を論じ、思想そのものを論ずる」とすれば、それは社会学に属する(16:71)とも言える。言い換えれば、妖怪学を「人類社会に関する上より論ずるときは、人類学、歴史学もしくは社会学に密接なる関係を有して、しかも一科独立の学となることを得」(ibid.)る、と円了は捉える。こうした学問分類に基づいて妖怪学を整理するならば、心理学の応用、諸学の形式変態学、そして第三種は「社会、人類に関する諸学中の一科とする」(16:72)ものとなる。

小括

以上、すべてではないが井上円了の主要著作のなかで「社会学」ないし「社会」がどのように捉えられているかを見てきた。一言でまとめるならば、円了は社会学を理論哲学の一部門として位置づけていること⁽¹³⁾、社会に関して言えば、それを進化論的に捉えていること、この2点に絞られるだろう。それはいずれも概ねスペンサーやフェノロサの所説の影響下に位置づけうるであろう。その限りでは、「井上円了の社会学」に特段の独自性は見られない、と言わざるを得ない。だがそれにもかかわらず、「井上円了と社会学」に関して、それだけで終わりにできないものがある。それが妖怪学である。円了の妖怪学講義の総目録によると、妖怪学は、第一の総論に続き、理学部門、医学部門、純正哲学部門、心理学部門、宗教学部門、教育学部門、そして雑部門という8つの部門で構成されるという。だが、これらの部門にその研究材料を提供するもう1つ別の重要な部門がある。それは、『井上円了選集』第19巻に収録されている『妖怪玄談』『妖怪百談』『続妖怪百談』『靈魂不滅論』『天狗論』『迷信解』、第20巻所収の『おばけの正体』『迷信と宗教』、第24巻所収の『日本周遊奇談』、そしてそれらと密接に関係する、井上円了の全国巡講日誌である「館主巡回日記」『南船北馬集』全12編、3度の世界旅行の記録『欧米各国政教日記』上下、『西航日録』『南半球五万哩』である。日本全国文字通り津々浦々を歩き集めた庶民の話や習俗・習慣、奇談、世界各国の政治経済や宗教、さらには市民の生活実態等が、これらの著作で詳細に記されている。

井上円了は、哲学者として、さまざまな社会現象を理論的に分析し解明しようとした。その限りで、円了にとって社会学は哲学の一部門であり、さらに応用学ではなく理論学であった。しかし、円了が分析しようとしたそれらの社会諸現象は、けっして他からの受け売りではなく、自らの足で歩き・見て、現場で考えたものであり、まさに彼なりの社会調査の成果であった。柳田国男は、井上円了の妖怪学を「色々な理屈」としか捉えず切り捨てた。それは誤解だと反論しても水掛け論になるだけだろうが、井上円了が1906年から1918年までの13年間に日本全国60市6島472郡2198町村を巡回し現地の人びとと交流し見聞を記録し残した事実は消えない。井上円了独自の社会学はここに始まる。われわれはつぎに、これら全国および世界各国の見聞録を分析し、井上円了独自の社会学に迫ることにしよう。

註

- 1 山口静一1982『フェノロサ・上』三省堂、34-50頁。初出は1973『埼玉大学紀要 外国語学文学篇』第7巻。
- 2 「東京大学法理文学部第七年報」内外教授申報抄録。フェノロサによる報告を邦訳したのは外山正一であると言われている。
- 3 秋山ひさ1982『フェノロサの社会学講義』神戸女学院大学。
- 4 宮永孝2006「社会学伝来考——明治の社会学（2）」『社会志林』52-4。
- 5 『フェノロサ「哲学史」講義』2013、監修・解題池上哲司、科研費研究報告書。「続」は2016。
- 6 山口静一編2000『フェノロサ社会論集』思文閣出版。
- 7 山下重一1992「フェノロサとスペンサー——「世態開進論」（1880）の検討」『英学史研究』第24号。
- 8 井上哲次郎1932『明治哲学界の回顧』岩波書店、70頁。
- 9 松本三之2017『「利己」と他者のはざま——近代日本における社会進化思想』以文社。
- 10 秋元律郎1979『日本社会学史——形成過程と思想構造』早稲田大学出版部。
- 11 「稿録」の翻刻と日本語訳は、ライナ・シュルツァ氏との共著「井上円了『稿録』の日本語訳」2010『井上円了センター年報』Vol.19を参照されたい。
- 12 ライナ・シュルツァ2010「井上円了『稿録』の研究」前掲年報所収。
- 13 井上円了は1887年6月筆の「哲学館開設ノ旨趣」で、哲学館で学習させる科目として、論理学、心理学、倫理学、審美学、宗教学、教育学、政理および法理学、純正哲学、東洋諸学と並べて社会学を挙げている(25:751)。東洋大学は1921年に専門学部社会事業科を開設、そこでは社会学のほか実際学科として社会政策、社会事業総論、社会事業史、社会教育、社会問題、社会衛生学などの科目が開講された。ちなみに、1946年に文学部社会学科開設、1959年社会学部開設。

参考文献

- 山下重一1974「資料 明治時代におけるスペンサーの受容」『國學院法學』第12巻第1号
- 山下重一1975「フェノロサの東京大学教授時代——社会学・哲学・政治学講義を中心として」『國學院法學』第12巻第4号
- 杉原四郎1980『日本経済思想史論集』第二章「フェノロサの東京大学講義——阪谷芳郎の筆記ノートを中心として」未来社
- 『史料叢書東京大学史 東京大学年報 第二巻』1993、東京大学出版会
- 小笠原真2000『日本社会学史への誘い』「プロローグ Ernest F.Genollos 研究」世界思想社

【Abstract】

Enryo Inoue und Soziologie

Takayuki SHIBATA

Enryo Inoue, Philosoph und Begründer der Tetsugakukan (jetzt Toyo Universität), studierte in der frühen Meiji-Ära Soziologie bei Professor Ernest F. Fenollosa, der als erster Vorlesungen über Soziologie an einer japanischen Universität gehalten hatte.

In seinen Werken verwendet Enryo oft das Wort „Gesellschaft“, das er dynamisch und entwickelnd verstand. Die Soziologie, die Enryo Inoue studierte, war die Entwicklungslehre der Gesellschaft.

Enryo stellt Soziologie als eine Philosophie in seinem System der Wissenschaft dar. Auf seinen Reisen durch ganz Japan und auch drei Mal ins Ausland sammelte er verschiedene Materialien und Informationen, und betrachtet die sozialen Erscheinungen und Probleme nicht nur philosophisch, sondern auch sachlich.